
妄想ライブラリー

廣瀬 るな

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

妄想ライブラリー

【Nコード】

N5716T

【作者名】

廣瀬 るな

【あらすじ】

モテ系サッカー少年Y。イケてるわりには不器用な彼の恋愛のお話、第二弾。

“ひみつのひ”の続編です

1 これから「妄想」の話をしよう（前書き）

このお話は100%フィクションです。

実在の人物とは絶対に！ 関係ありません。

……怒らないでね。

1 これから「妄想」の話をしよう

事の起こりは、大島優子（仮名）だった。

『悪いんだけど、明日の放課後、図書委員会に私の代わりに出席して。そのとき、委員長選出が有るんだけど、うちのクラス（つまり私って事だけど？）がやりますって、みんなの前で完璧に主張してね』

「はあっ？」

俺は携帯電話を手に、スパムだと思って消そうとしていたメールに指を止めた。

大島優子（仮名）は俺の高校のクラスメートだ。どうして仮名かというと、俺が彼女の本名を知らないから。でも、笑った顔がタレントに似ているってことで、みんながそう呼んでいるから、大島優子（仮名）。まあ、俺と彼女はそれ程度の付き合いだ。そんな大島優子から、なんでこんな

“ご依頼”

メールが来るんだ？ 彼女の

“熱烈な”

お友だちに頼めば良い事なのに。俺は首を捻った。

俺の名前は、篠崎陽介。18歳、高校生。身長180センチの自称爽やか系サッカー少年。

この俺には悩みが有る。そう、彼女の事だ。俺の彼女は、超可愛い。マジで、可愛い。大体男がこういう事を言う時は、アバタも何とやら。たいした事無かったりするモノだけど、俺の朝香^{あさか}は違う。本気で、可愛い。

いつもは地味なジャージに眼鏡に三つ編み。まるでオタクアニメの萌えキャラみたいな格好で、別の意味でヤバい彼女。ぶっちゃけ“健全な男子高校生向けアイドルキャラ”

じゃない。でも、俺という時は特別なんだな。

朝香は大きさに笑わない。俺を見上げながら、ゆつくりと微笑む。眼鏡の上の隙間から大きな目を覗かせ、優しく瞬きし、口元をそっと綻ばせる。なにかもの言いたげに膨らむ唇に、俺は頭を下ろし、彼女の声を聞こうと耳を近づける。

「何だよ」

すると

「馬鹿っ」

って彼女は囁くんだ。朝香の吐息が俺の耳を通し全身に流れ、パブロフの犬みたいに俺は彼女を抱きしめている。

「俺、馬鹿だから」

何も考えられなくなる位、朝香の事が好きだ。髪顔を埋め嗅ぐシヤンプーの香りも、スベスベした頬に俺の頬をすり寄せる瞬間も。

「凄え、好き」

彼女は、

“分かつている”

みたいな感じで、俺の背中に細い腕をまわす。でも、いや、分かつてないなっと思う瞬間が有る。それは、俺は彼女の事を独占したいのに、朝香はそれを許してくれないからさ。

嫌みじゃなく、俺は普通にモテる。でも、どうやら変な人間に好かれる傾向に有るらしい。だから、今まで付き合っていた女の子達は、訳の分からない嫌がらせに合う事が妙に多かった。別に俺のファンが何かをしているって言う確信は無いけど、兎に角嫌な雰囲気があるのは確かだ。そんな思いを朝香にさせたくなくて、

『周りには内緒にしておこう』

と言い出したのは俺の方。彼女も納得し、というか、その方が良かったって言ってくれ、最初はそれで良かった。でも、俺の方がそろそろ限界だった。

男ってさ、独占欲の塊みたいなもんでさ。俺の朝香に誰かが無駄にメールをしてきたり（念のため言っておくが、メールを盗み読みしたりはしていないぞ。彼女の反応から、何となく同じ男からしつ

こいメールをもらっているんじゃないかな〜って、感じる事があるわけよ）平然と男友達としゃべっていたりすると、何か胸の奥がすつきりしなって、

『俺の彼女に手を出すな！』

って言いたくなるんだ。でも、できない。なにしろ俺が、

“周りには内緒宣言”

してしまったモノだから。

当然、校内ですれ違った時にちよっかいを出したり、目線を合わせて頷くのもNG。キスハグ厳禁、手さえつなげない。どこかで待ち合わせて一緒に帰る事も一度もした事が無い。たまの休日は、俺のサッカーの練習で潰れ、マネージャー席で他の選手の世話をする朝香を見ているだけ。

こんなに好きなのに、何この距離感？　なんとかえっちまでこぎ着けたけど、体許せても、心は許せない？　みたいな違和感も合っで、俺は不満たらたらだった。

しかもだ。先週、運良く彼女の兄貴が出張で外泊し（彼女はお兄さんとの二人暮らしなんだ）朝香の家で久々に二人だけで過ごせるようになった時の事だ。俺のこのもやもやしている気持ちに気づいているみたいな感じの彼女が

『今晚は、朝まで陽介のしたい事、していいよ』

なんて、ハート満載な事を言ってくれ、超はりきって妄想膨らませていたはずが、いきなり夜の9時過ぎにメールが届き、あいつの兄貴が帰ってくる事になってしまっただけで大変。

「これから駅前と一緒に飯食おうって言われてもな」

と困った顔の朝香を責める訳にも行かず、俺は泣く泣くあいつの家を後にした。

一緒にお風呂に入ろうって、言ってくれたんだぜ？　これ、初体験だったんですけど。それから、パジャマ姿の朝香を膝にのせ、テレビ見ながらいちやいちゃする予定だった。夜も濡れあって、朝には一緒にご飯食べ。まるで誕生日のイベントみたいに最高な夜を過

「ごすはずだったのに……。全て、ペア！」

だからこそ、俺は明日の金曜日に賭けていた。午後からは雨が降る予定でグラウンドは使えない。こんな時、サッカー部の練習は廊下を使った自主トレに変更になる。ある程度のノルマをこなせばさっさと帰っていい事になっているから、あいつの兄貴が帰ってくるまでの数時間を、朝香の家で過ごそうって魂胆だった。そしてこの前できなかった欲望を、しっかり叶えさせてもらおうと思っていた。だから、

『嫌だ。断る』

大島優子（仮）にメールを返信する。すると速攻返事が返ってきた。『駄目。もう先生に代理届けた。内申点無くしたくなかったら、出た方が良いでしょう。でさ、私が委員長にならなかつたらどうなるか、覚悟しといてね???』

だと。……。ふざけるな!!

2 もしも図書委員がドラッカーを読んでいたら

この日、朝から大島優子（仮名）は休みだった。
『なんだか最近、体調が悪かったらしいよ。でさ、急遽、検査入院
だつてさ〜〜』

無駄に情報通の安倍氏が教えてくれた。しかも

「あゝあ、今日は図書委員会長の選出日だつて言つのに〜〜。彼
女も可哀相〜〜」

と、なんだか聞き捨てならないセリフを口にした。

「それつて、何？」

思わず俺は聞いてしまい、周りの他の男達が一瞬どよめいた。

「お前、知らないの???」

それは通称、

“図書選挙”

毎年一番可愛い女の子が図書委員長になるというレジェンドが有り、
自信のある女子は、毎年それに賭けているらしい。

『くだらない。俺の朝香が一番側可愛いつてのにさ』
の言葉を飲み込みながら、

「実はさ、俺、今日の図書委員会に代わりに出されるハメになった
んだよ、大島優子（仮名）に押し付けられて」
と打ち明けた。

「誰か代わりに出てくれないかな〜」

すると、

「マジ！」

俺の周りに一気に人だかりができた、男の。

それから休み時間ごとに、俺の周りには人（もちろん男）が集ま
つて

『選挙権、くれ！』

と騒いだ。ネットオークションに出したら、マジで儲かりそうな雰

困気。でも、委員会の担当教官に正式な代理人の届けがされている限り、俺が出ないといけないって、安倍氏が悔しそうな顔でアドバイスをしてくれ、群がる男達をせつせと蹴散らすハメになり、超、面倒！

そんな感じでイライラしている所に追い打ちをかける出来事が起こる事になる。

「ちよつと、いいかな？」

昼休み、現れたのは前田敦子（本名前川篤子）だった。こいつも例に漏れず、アイドル意識した髪型に、リスみたいなアイメイク。

大島優子（仮名）の確か、

“お友だち”

そいつがいきなり、飯食っている俺の机の上にバン！　って両手あて、

「話しが有るからこつちに来て」

だと。俺の都合は聞かないのか？　見て分かる様に、俺、手には握り飯、成長期に必要な栄養を補充しているとこなんですけど。

「にゃん（何）でらよ（だよ）」

いや、それ以前に、基本、俺、お前ともお友だちじゃないよ？

「今、飯食ってるし、ここで話せよ」

すると、なに

「もっ~~~~」

って、アヒル口？？？　なグラビアフォトが口をきいた。

「私が“話がある”って言うてんだから、素直に聞きなさい」

……なにこの強引な展開。周りの突き刺す様な視線（98%男）をまともに浴びてのこんなシーン、まるで告白ごっこ？　朝香に見られたくないな〜とか思いながら前田敦子（本名前川篤子）を見上げた。マジ、迷惑。

すると彼女は

「もっ、こんな事してるのって恥ずかしんだから！」

って、俺の手を引っ張るじゃないか。常識で考える。巻き込まれて

いる俺の方が恥ずかしいだろ？　そして転がる握り飯、慌ててキヤツチする友人A、意地の悪いにやけ顔で手を友人T、見た目よりそうとう力の強い少女M。

「何でだよ！？」

これってまるで、ラノベの展開？

そして俺は冷やかす声を背中に聞きながら、ずるずると校舎の裏まで連れてこられた。

どうも俺、この手の女は苦手だった。これは俺が勝手に思い込んでいるだけけど、自分が美人だって分かっている、周りの気を惹いて、他人をコントロールするのが好きって感じがするからだ。こういう女（男の場合もある）に引かかると、いい様に操られてお終いつて感じがして、幼気^{いたいけ}で健全たる青少年の俺は、警戒警報を鳴らしてしまうのだった。

で、彼女は立ち止まり、くると向きを変えると

「何で私がわざわざ君の事を呼び出したと思ってるの？」
だと。分かる分けないだろ？

「私が図書委員な事は知ってるよね」
いえ、知りません。

「今日、君が金原ちゃんの代理で委員会に出てくれるって言うから、わざわざこうしてお礼に来てあげたんじゃん」

へへ、大島優子の本名は、金原なのね。って、何でお前が図書委員だつて俺が知っているって前提が有るわけ？　それ、おかしくね？
何、自意識過剰してるの？　そんな困った顔の俺に、彼女はいきなり

「だからこれ、はい」

って、何かを押し付けてきた。

「何、これ？」

赤いリボンのついたギンガムチェックの小さな紙袋。妙にAKPを意識した感じの柄。

「だ・か・ら！」

彼女は大きく頬を膨らませた。

「今日出てくれる事に対しての、私からのお礼。折角の手作りなんだから、味わって食べなさい！」

可愛く叫び、そして、去って行く。

これってさ、まんま、出席する事への労い、なんて素直に受け取れる？ いや、貰ったから必ず出席しろって話？ ……いや違うだろう。彼女、前田敦子（本名前川篤子）に投票しろって事だよな？

俺はその小さな袋を摘まみ上げ、ため息をついていた。いわゆる、知能犯？

ブルー入った俺は、何か楽しい事を考えるしかないなって思いながら、教室へと引き返した。例えば、だ。こうやって歩いていて、教室に入るだろう？ その姿を見計らって、いきなり後ろから

『ちよつと話がある』

って、怒った声に呼び止められて。もちろん、振り向くとそこに朝香がいてさ。俺の指、手首じゃなくて指、を細い指がぎゅつと握って、ちよつと背伸びがちになりなつて、それでも見上げながら、真剣に睨む訳。

『ここじゃ話せないから、部室に行こう』

強引に引つ張つてられてさ、二人つきりで校庭の片隅にあるロッカールームに向かうんだ。

『おい、何だよ、急に。みんなが見てるぜ』

世間体を気にする小心な男の振りをする俺。彼女はぱつと振り向いて。

『やつぱり、こんなのは、嫌だ！』

叫んで、俺の胸に拳を当てる。

『さっきの、何！ 私、見てたんだから。あの女、絶対陽介に気が有るんだ。もう、何でそんな女のあと、のこのこついて行くんだよ。信じられない！ 私の事、彼女だっと思ってないの？ あんなの見ていて、私がどんな気持ちになるか、考えた事ないの、この、役立たず！』

いや、この場合

“ 役立たず ”

は不適切だ。

『 この、鈍感！ 』

このくらいの所で、目に涙ため、俺を見上げる。そしてむぎゅって抱きついてくる。

『 陽介の彼女は私だよ？ ねえ、分かってるの？ 』

そして俺は彼女を優しくあやすんだ。

『 当たり前だろ、朝香。俺、お前だけしか見えていねえし 』

なんて言って、蕩ける様なキスを、校舎の片隅で（ここ、重要ね）しちゃうんだ。でもって、仲直りした俺達は、手をつないでみんなの前に現れる、と、こんな感じ。ラブだぜ、青春だぜっ！

……。にやついて教室に入ってしまった俺は、このあと更なる不幸に見舞われた。

2 もしも図書委員がドラッカーを読んでいたら（後書き）

あくまで、フィクション！

3 天使で悪魔

みんながブレザーの制服を着ている中、たった一人だけ、体操着のハーフパンツにクラブジャージ。これって、鳩の中に迷い込んだアホウドリの気分。かなり間抜けな姿で五時間目を迎える事になった俺を

「すげ、マッチョアピールしている筋肉馬鹿っぽい」

安倍氏が笑う。

「うるせえ」

教室に帰った俺の椅子の上には、誰かの弁当の残飯（多分複数名）が捨てられてあり、俺はものの見事にその上に腰を下ろしてしまっていた。まさかスラックスだけをジャージに替えるのはあまりにフアンキーで気が引けて、取りあえず、全替え。

エロ眼鏡のあだ名を持つ透は、人の心を見透かす事にかけても長けている。その男曰く

『陽介はどちらの派閥にも属していないから、選挙戦立候補者にとつては、なんとか土壇場で取り込みたいって所なんだろうな』

『で、ついでに、大島優子（仮名）に信頼され、前田敦子（本名前川篤子）におねだりされたって事で、完全にファンから憎まれたね』みんな他人事だと思つて、楽しんでいやがる。

何はともあれ、委員会に出席しない訳にはいかないみたいだし、俺はため息が止まらなかった。そして、五限目の休み時間。移動に廊下を歩けば

「あゝ、ご免ね〜」

面識のない誰かが集団でぶつかってきて、

「ヤバイよ〜、どいて〜」

階段を降りていると、何かが振ってくる。多分、濡れ雑巾。俺の後ろで

「ぎゃっー」

って悲鳴と、ビチャツっていう残忍な音が聞こえた。俺に頭の中には、なんだつけ？ 限りなくブラックに近いブルーとかいう、昔の小説のタイトルが点滅していた。

しかも何？ 気分を取り直し、朝香に夕方一緒にいたいってメールしようと思つて、こっそり携帯の電源を入れた瞬間、

「はっ！？」

スパムメールが一気に200って、ありえねえ！ 誰かがどこかのエロサイトに俺のアドレスチクリやがったな！ くそっ！ ファツP ? だぜっ！！

……もうこうなつたら、委員会は公式辞退だ！

だから授業が終わつた瞬間、俺は速攻図書委員会顧問のマダム大崎を探した。彼女は 20代後半の、透の言葉を借りると

『夜のコスプレ女教師』

家政学専門のはずが、なぜかいつも白衣姿で、きちんとした黒の短いタイトスカートをはいている。しかもセルフフレームの四角い眼鏡をかけ、長い髪はいつも夜会なんかかって言う髪型でアップにしている、一見堅そうなタイプに見えた。

『マジでAVにいるタイプって感じ。お昼は清純でホワイトな家政科の先生、そして夜は生徒を調教するブラックな体罰教師。深夜の調理室、銀色に光る流し台。ほどいた髪に、真っ赤な口紅がニヤツと笑う。』

“あなた、昼の授業を真剣に聞いていないでしょ？ それがどんなに悪い事が、先生が分からせてあげてる”

開けた白衣の下には黒の網網コスチューム、もちろんエナメルのピンヒールはいてさ。

“あなたの体に教えてあげる”

つて。あゝ、俺も料理されてえゝゝ』

……。捌かれちまえ！

そんな彼女は図書室にいた。

「あら、篠崎君、早いわね」

書架の奥で何やら調べ物をしていたらしい。俺は勢いでここまで来てしまったけど、なんて言って委員会を辞退すればいいのか、本当の事を言ったらむしろ馬鹿だっと思われるし、まいったなっと思っただ。すると

「ちようど良かったわ。今日、司書の方が病休とられていてね。ちよっとお手伝いしてくれるかしら」
と、彼女は俺を奥の部屋に誘った。

これって透好みのスチューエーション？ 馬鹿な事を考えていると、なんと、先生の方から声をかけてきた。

「今回、色々有ったでしょう？」
って。

「あつ、はあ」

俺はどれだけ先生が知っているか分からないし、カマかけられたとしたら下手に乗ってもいけないな、とか思いながら曖昧に頷いた。

「金原ちゃんに委員会指名されたでしょ？ 報告受けてるし、その結果どうなったかちよっと思像つくんだよね」

そしてくすくすっと鼻の奥で笑った。近づいていると、いかにも大人の女の人って感じのバラみたいな化粧品が漂い、俺は妙に落ち着かない気分になった。

「毎年ね、図書委員長の選出は大荒れなんだから。実はね、私もこの学校の卒業生でね、歴代の図書委員長の一人なのよ」

「えっ！」

俺は思わずマダム大崎先生の顔をまじまじと見た。そう言えば、確かに美人だし。俺は元モー娘。で今も現役アイドルをしている七澤なんとかの顔を思い浮かべていた。

「やだあ、そんなに驚かないでよ」

先生は乙女な感じでふふふつと笑い、俺は何となくヤバい雰囲気を感じ、どうにか話題をそらそうとした。

「いや、それより、何で俺が指名されたのが分かんないんですよ。だってほら、今まで図書とも金原さんとも無関係だったし」

一步下がると、先生は一步近づく。

「ほら、それはね」

先生は俺の手に新しい本を数冊手渡した。

「気がついていないかもしれないけど、君、魅力的だから」

「はあっ？」

眼鏡の上から見上げる視線。これって、覚えが有る。朝香が俺の事、騙しちゃうぞって感じの、ハイパーモード？

「なっ、何言ってるんですか？」

「だから、ね」

彼女はそつと息を吹きかけた。いや、俺が勝手にそう思っているだけかもしれない。

「選挙投票の結果はある意味出ているの。でもそれは、だいたいが男子の固定層。でも、女子の無派閥は宙に浮いている訳。それを取り込むために、君の事、選んだのよ、彼女、きつと」

「はああああっ？」

「だってほら、金原さんに、他の子を説得してって彼女に投票する様に呼びかけてって言われたんでしょ？」

先生の白衣の下は開衿のシャツで、

「君のその野性的だけどナイーブな視線で見つめて、他の女の子達をクラッとさせようって魂胆だったと思うよ」

俺の角度だと微妙にブラが見えるきがして……。

「私だったら、絶対まいっちゃうだろうな、君みたいな男の子に」

あつ、先生グロス塗りたてだ、なんだ気がついてしまい

「あつ、俺、急に頭が痛くなってきた！」

逃げないと食われるって、本能的に思った。そう、思ったんだ。それから行動に移したはずだった。

3 天使で悪魔（後書き）

次が最終話になります

4 俺の彼女がこんなに可愛いはずがない

コスプレって言うと、普通はいつもしない格好を思い浮かべると思う。例えば、メイド姿とか、チアリーダーとか。でも最近、制服路線だと俺は思う。ハルヒもそうだし、もしドラも、けいおんだって、そうじゃね？

って事で、やっぱり俺にとってのコスプレMAXは、制服。しかも自分の学校の。ある意味しょぼいかもしいないが、それにはそれで訳がある。なにしろ朝香はいつも俺の前ではジャージばかり着ているから。

別にそれが不満だって事じゃ無い。きっぱり言わせてもらうが、朝香はスタイルがいい。身長は、ぎゅって抱きしめたとき、彼女の頭が俺の胸に埋まる^{うず}くらいの高さで、体に手を回すと、腕の中にすっぽりと気持ち良く収まる。超可愛い。それからウエストは俺の両方の掌でくるっと包めちゃうんじゃないかってくらい細くって、でも、意外と出るべき所は出ている。彼女に体重を聞くと平然と答える。

『49キロ』

それって女子基準だとかなり重いらしいけれど、朝香はそんな事気にしないタイプで、よく食べて、よく動く。だから触った時、痩せ過ぎた女みたいにかサカサした貧乏臭さが無い。むしろ弾力のあるマシマロ系で、このまますっと抱きしめていたいって、マジで思う。もう、俺の好み、ど真ん中。というか、惚れた弱み？ 俺の好みは一直線に朝香そのものだ。その凄く

“ いい感じ ”

な所が、ジャージだと手に取る様に分かる。

ちよっとオーバーサイズのジャージを着た時のシルエット。でも、彼女が動く度に本来のフィギュアが浮かび上がって、俺と二人つきりでいる時のあのラインを彷彿とさせてくれ。あゝ、朝香って好い

女だなんて思わせてくれる。でも他の誰かにとって、彼女のそんな姿は

“モツさくて、イケていない”

そのギャップが俺には嬉しい。

なんて言うか、他の男達の目が節穴で、俺ばっかいい思いをして
いるって言う、優越感、みたいな

だからジャージ姿はジャージ姿で構わない。でも、何となくそれ
だけじゃつまらない。だってそうだろう？ 制服姿の朝香とは、ほと
んど一緒にいた試しがないから。

あいつと俺とは、なぜかこの三年間クラスが違う。それに、人目
が有る所であいつと会う限り、いつだって距離が遠い。だからって、
『制服姿の朝香といちゃいちゃしたい』

なんてリクエストするのって、なんだか妙に気恥ずかしい。いい年
したオヤジが女子高生に

“制服姿をじっくり見せてくれ”

ってお願いする感じで、絶対、

“何？ 変態??”

って思われる気がするんだよな。ああ、ジレンマ。

それでもやっぱり、制服ならではのアクセントってのにも期待
してしまう。例えば二人で制服姿で手をつなぎながら歩いて、他
愛もない事で盛り上がっていると、不意に強い風が吹くわけ。すると
『！』

みたいに声にならない叫びってヤツで、朝香はあわててスカート押
さえたりして。で、手をつないでいるから、自然に俺の手もスカ―
ト押さえていてさ。

『お前さ、そんな短いスカートはいてるからだよ』

な〜んて事、偉そうに言ってみて。でもって朝香はうつむきながら
口ぶり尖らせて

『馬鹿。陽介がミニスカ好きだろうなって思ってるから、陽介の好
みに合わせているんだぞ』

とか、拗ねるんだ。彼女の顔を覗き込むと、真っ赤になっていてさ。それを気づかれたって感じた朝香は、今度は思いつき手を振りほどくんだ。俺は落ち着いた声で、

『分かってるよ』

大人々な感じで余裕の対応。

『だからそんな、拗ねるなよ』

とか言いながら、彼女の腰に手を回してさ。

『制服、すげえ似合ってるし、朝香、超可愛いし』

そして怒っているはずの彼女は

『うん』

つて、頷いて、俺に擦り寄るんだ。それから俺の耳もとで囁く。

『私ね、陽介に嫌われたら、もう、学校にだって行けなくなっちゃうかもしれない。それぐらい、陽介の事が好き。大好きなんだからわかってよね』

……もう、最高！

「陽介」

あゝ、もう一度名前呼んでくれない？

「陽介」

だから

「もつと名前呼んで欲しいな」

そこで俺は目が覚めた。

「おい、大丈夫か？」

覗き込んでいたのは、誰でもない、男。しかも、安倍氏だった。

「陽介……」

そして首を傾げた。

「マジで、打ち所、悪かった??」

どうやら俺は図書館で倒れてしまったらしい。というか、逃げようとして（マダム岡崎が他の人にした説明した内容は、それとは違っていたが）本棚にぶつかり、落下してきた本が頭を直撃し、倒れ

てしまったらしいのだ。

一度目が覚めると、頭の中ははつきりしていた。起き上がった俺に養護教官が話しかけ

「まあ、大丈夫みたいね」

と保証してくれ。それを聞いた安倍氏は、

「良かったな」

とか言いながら上の空で、携帯をいじっている。なんだか俺は丸無視？

「……所で、委員会、どうなった？」

時計の針は四時を回っていて、すでに始まっている時間。さすがに今回の様な事が有ったんだから、あの大島優子（仮名）も俺を責める事はないだろうと思いつつも、責任を感じ聞いてみると、

「そうなんだよ！ 図書選挙だよ！」

安倍氏は突然食い付いてきた。

「お前、こんなんでは出ないだろう？ だから公式にお前の代理で参加させてくれ！」

願ったりだ。

「じゃあ、ここにサインして」

差し出された用紙には、

“私、篠崎陽介は、不慮の事故で委員会への出席が不可能となりました。因って、クラスメイトの安倍友和に図書委員長選出の権限全てを譲渡し、代理として出席してもらおう事を依頼します”

明らかに安倍氏の字……無駄に用意、良くね？

「ああ、まあ、いいや、はい」

すると彼は

「彼女が家まで送って行ってくれるって言うから、呼んである」

と、訳の分からない事を言い残し、突風の様に姿を消した。

「誰だよ、彼女って」

首をひねりながら、

「あゝ一人で帰っちゃ駄目」

と後ろから呼び止める声を見し、バッグを取り上げる。

「もう大丈夫です。お世話になりました」

なんだか今日は果てしなくついていない。その上、身に覚えのない
“自称彼女”

に登場されたら、堪ったもんじゃない。いや、それ以前に、どうせ
朝香は俺が思うほど、俺の事なんか気にかけてくれやしなんだゝ、
なんて思いながら携帯を開く。あつ、やっぱり。着信無し。

と、ここで油断したのがまずかった。ドアを開けた瞬間、どしん
と俺にぶつかってきた誰か。

「きゃっ！」

つて悲鳴と、まくれ上がったスカートと、見ちゃったら犯罪的な太
腿と、眼鏡越しに見上げるあの視線。

「あつ、朝香！」

そこに倒れていたのは、彼女だった。

「この、粗忽者！」

頭を打って、脳震盪を起こして、安静が必要だったはずの俺。足
首を挫いて

「痛い……歩けない」

つて、ちよい恨み入った声の朝香。でも彼女に

「おんぶ……」

なんて言われ、素早くしゃがみこんで背中差し出してしまう忠犬な
俺。

「校門前にタクシー来てもらってから、家まで送って行って」

俺の首に腕を絡み付けながら携帯を押す彼女、耳もとで聞こえる、
囁く様な電話の声

「もしもし」

後ろから見たら、スカートが相当ヤバい事になっているんじゃない
？ つて事、心配なはずが、背中に当たっている柔らかな膨らみと、

彼女の体から立ちこめる香りが俺の理性を奪って行き。俺達を見てざわめくギャラリーも、冷やかす様な声も全てスルー。彼女がしがみつき

「さっきはご免、粗忽者なんて言っちゃって。本心じゃ、ない。」の一言で、俺・in・パラダイス。

みつともないって思われても、自然に顔が笑えてくる。

安倍氏がどこまで知っていて、朝香を呼んだかは分からない。でも今の俺は、この幸せにどっぷり浸かっていたい感じ。

もしもだよ、これがどっかのラブコメだったら、夢オチとか来るかもね。いや、そんなの、ファツPさ。妄想抜きの、目の前にいる朝香が一番好きだ。

おしまい

4 俺の彼女がこんなに可愛いはずがない (後書き)

高校生の男子らしく所が書けていたら嬉しいっす

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5716t/>

妄想ライブラリー

2011年6月7日13時30分発行